随想　簡単に死ねとは…

～言葉の乱れは、生命の軽視に繋がりかねない～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

七月二十二日の日経新聞一面のコラム《春秋》に四年前の《待機児童》に関しての記述があった（待機児童問題の切実さを訴えた匿名ブログの書き込み「保育園落ちた日本死ね」が、恒例の新語・流行語大賞に選ばれたのは四年前。以下略）。

このコラムは災害弱者（特養・千寿園の老人一四人）が洪水に呑まれて亡くなったことを悼んだ気持ちを述べたもので、著者の取り上げた部分には大きなウエイトは置かれていない。しかし「保育園落ちた日本死ね」という言葉は当時から嫌な意味で心に残っていた。

ちなみに、その投稿原文を確認してみた。インターネットで《保育園落ちた。日本死ね原文》で調べたところ「Jcastテレビウォッチ二〇一六年二月二十二日において、『日本死ね』のタイトルだったネット投稿の全文が伝えられていた」として以下がヒットした。保育園の申し込みで、はねられた母親がネットに投じた怒りの書き込みが話題となっている。「保育園落ちた日本死ね!!!」というタイトルで、こう書かれている。

「不倫してもいいし賄賂受け取るのもどうでもいいから保育園増せよ。オリンピックで何百億円無駄に使ってんだよ。エンブレムとかどうでもいいから保育園作れよ。有名なデザイナーに払う金あるなら保育園作れよ。どうすんだよ会社やめなくちゃならねーだろ。ふざけんな日本」「保育園増やせないなら児童手当二〇万にしろよ。保育園も増やせないし児童手当も数千円しか払えないけど少子化なんとかしたいんだよねーってそんなムシのいい話あるかよボケ。国が子供産ませないでどうすんだよ。金があれば子供産むってやつがゴマンといるんだから…国会議員を半分くらいクビにすりゃ財源作れるだろ。まじいい加減にしろ日本」（二〇一六年二月十五日、投稿抜粋）。

◆「理不尽さを感じて、独り言のつもりで投稿」

汚らしい言葉が並ぶが、相当に怒っているのはわかる。街の声を聞いてみると、「気持ちはすごくよくわかる。日本が死ねは言い過ぎだけど」（双子を持つ母親）、「今、結果待ちなんです。落ちたらこうなるかも」（八か月の子を抱いた母親）、「二人目は入れなかった。一年待った。自治体選んで子どもを産むなんておかしいけど、そうしないと仕事は続けられない」（二人の子の母親）。司会の小倉智昭曰く、「日本はどうなってるんだを『死ね』に置き換えた気持ちは伝わってきますよね」。

「とくダネ！」は投稿者に話を聞いた。東京都に住む三〇代前半の女性だった。事務職の会社員で、三月（二〇一六年）で一歳になる息子がいる。育児休暇が終わって、いざ働こうと思ったらこうなったという。「理不尽さを感じて、独り言のつもりで投稿した」のだそうだ。

内容は同情に値するものの文章は極めて品がなく、腹立ちをぶつけるにしても書きようがあるだろうと思うのは筆者だけではあるまい。とにかく不愉快になるのは《死ね》という言葉を当たり前のように使う無神経なセンスである。

このような心根を裏に隠して職を探されても、雇う側は困る。思うようにならないときにこう口走られては、組織が壊れてしまうように思うから…。

筆者は仕事柄、生物の死に接することは極めて多い。病にかかって瀕死の動物に接し、それが死んでしまう経過を見るにつけ、生命の持つ《ある種の輝き》を実感する。瀕死であれば、その動物は、当然健康な個体が持つ美しさがあるわけではない。みすぼらしく、ときに糞便で汚い。しかし、瀕死とはいえ《生きている》と主張している《力》のようなものを感じるのである。その同じ個体が死んでしまった瞬間に単なる《物質》と化す。命とは不思議な力を持っている。

近頃のテレビ番組等で、若いタレント（いわゆるパーソナリティーを含む）が簡単に『死ね!』『殺す!』と口に出す。本人もその業界人も実際に《死んでしまえ・殺人を起こす》ことを考えているわけではないことは、筆者にもわかっている。しかし《死》に触れる機会の多い身としては、このように安易に『死ね』とか『殺す』といった物騒な言葉は聞き逃せない。

著者の子供の頃には老人が自宅で亡くなるのは当然のことで、著者が一八才のとき、祖母が病み徐々に衰えていくのを肌で感じた。身近な人が亡くなる経験は貴重であることを、身をもって体験している。また、当時の男の子は小学生でも小刀（こがたな。大人たちは肥後守と呼んでいた）を持っているのは当たり前で、学校前の文具店にはいつでも買えるよう展示されていたし、昼休みにはポケットにある小刀を使って鉛筆を削り、また学校の裏山（当時郊外の学校に裏山があることは多かった）で竹を根から切り出して、笛や竹とんぼを作ったものであった。当然、指を切るのも日常茶飯事。小刀が危ないことは経験で学んだ。

自分に危険であれば、他人に刃を向けることはあってはならない。それが自然に教え込まれる常識であった。

最近（といっても二〇年近くも前からかもしれないが）、小・青年の遊び方は大きくゲームに偏重している。そのゲームには《殺す》《死ね》等、物騒なセリフが充満している。ゲームへの慣れは小学生時代に始まり、三〇歳台の大人にまで至るらしい。

ゲームであるから、死んだキャラクターはリセットで生き返る。死んだ者が生き返ることはないことは常識で判断はできても、潜在意識に刷り込まれた生命の軽視は精神状態に影響を与えることは自明であろう。

先に挙げた「保育園落ちた。日本死ね」の投稿に対して街の意見では、汚い言葉に対して批判的である人も多いようである。もちろん、言いたいことはわかる。追い込まれてつい言葉が過ぎたのだろうことも推察できる。しかし、この言葉遣いの母親（父親であっても同じ）に教育された子供の精神構造はどうなるのか、それも容易に推察できる。

数年前に《石原裕次郎シリーズDVD》を購入した。彼のデビューは筆者が二二才の頃であり、大ヒット映画は中学生から高校生のときであるから、今から六〇年も前。当時のわが国がいかに貧しかったかは、映画のシーンから垣間見える。しかし、当時の女性（女優）だけでなく、アウトローたちの言葉遣いですら、かの投稿女性のものより遥かに優美でおおらかである。映画のシーンで使われた言葉は大方の社会でも使われていた。

それを考えると、現代人の言葉に顕われる荒廃度合いは目を覆うものになっているのであろう。自分の使う言葉が次世代への道しるべとなることをもっともっと知ってほしいと実感すると共に、働きたい（働かねばならない）人への機会をどのように与えるかは、社会全体で解決しなければならない喫緊の課題だとも感じた。